

Sound Bites:

ヴェルディ・バリトンを目指す期待のリリック・バリトン、大西宇宙

「昔は今よりずっと声が低かったので、バスのアリアばかり歌っていました。」大西氏は10代の頃を思い出し、こう語った。

ハイ・バリトンへの兆しは突然現れたという。急に高い音へのアプローチを見出し、歌の先生さえを驚かせる。近年はさらに、その均整の取れたリリック・バリトンの響きに磨きをかけ、去る5月、晴れてシカゴ・リリック・オペラのライアン・オペラ・センターにその名を連ねた。

IFAC ジュリアード声楽コンクール優勝後、大西氏はジュリアード音楽院への奨学金を手にするが、氏曰く「英語の試験をパスするのに1年半もかかってしまったので、アメリカへの移行はとても大変でした。ジュリアードでの学生生活は大変ハードだったので、声のバランスを保てるよう気をつけていました。アメリカ人歌手は声が大きいですから（笑）」

ジュリアード音楽院では、エフゲニー・オネーギンのタイトルロールを演じた。「良い環境で歌うことができ、幸運でした」と彼は語る。「小編成のオーケストラだったので、オネーギンという大役にも関わらず自分の声で素直に歌うことができました。役を勉強する際には、プーシキンの戯曲なども読みました。オネーギンという人物はキャラクターがとても複雑で、一言では語り尽くせません。」

大西氏はオペラ・インデックスやリチャ・アルバネーゼ＝プッチーニ国際コンクールなど、様々なコンクールで勝利を重ねてきた。『ファウスト』ヴァランタンのアリアと、『道化師』シルヴィオ役がいつもの彼の“Winning song（勝利の歌）”だ。

30歳を迎える大西氏は、いつの日かヴェルディの大きな役にも挑戦したいと話す。筆頭に挙げたのは『運命の力』。現在はシカゴオペラの研修所で、しっかりと自分のペースで声に磨きをかけられていることをとても嬉しく思っている。

今月彼は、世界初演となる新作『ベル・カント』に出演する。オペラには日本語のセリフがいくつか登場し、彼は自分のパートをこなしながら日本語コーチも務める。

大西氏は目標する人物として小澤征爾氏を、そして尊敬する人物として村上春樹氏を挙げる。「村上春樹氏はアメリカ文学を勉強するきっかけとなった。『グレート・ギャツビー』、『ライ麦畑でつかまえて』や、レイモンド・チャンドラーの作品群をはじめとして、数々の名作を翻訳している。彼の作品がアメリカ人にも人気なのも納得できます。彼の作品は、僕とアメリカ文学の架け橋のようなものでした。」

ブライアン・ケロウ著